

# 報道関係者と民博との懇談会 話題一覧

平成30年5月17日(木)15:30~16:30 懇談会

※懇談会終了後、お時間のある方は引き続きご懇談ください。

## 1. 挨拶

— 吉田 憲司 (館長)—

## 2. ニュースリリース

●みんなくの最新情報と今後3カ月の行事をご案内いたします。

— 園田 直子 (議長)—

## 3. 国内外に広がるビーズの輪

[詳しくはこちら](#)

2017年春に開催し、好評を博した開館40周年記念特別展「ビーズ一つなぐ・かざる・みせる」のその後の動向について、①国外(英語版図録「Beads in the World」の出版)、②国内(拡大するビーズ展)、③社会連携(ビーズバッグの受け入れ対応)の3つの観点から、お話しします。



— 池谷 和信 (人類文明誌研究部 教授)—

## 4. 音楽の祭日 2018 in みんなく

[詳しくはこちら](#)

国籍、年齢、性別を超えて、音楽を愛するすべての人が無料で参加できる市民参加型の一大音楽イベントです。2003年以来、今年で通算16回目の開催となります。プロアマ、ジャンルを問わず、日本を含む世界の楽器を使った音楽パフォーマンスをする方たちが出演します。音楽を共通語に、みんなで世界の音楽を楽しみ友好を深めます。

日時：6月17日(日)10:15~16:20(開場10:00)

場所：国立民族学博物館 講堂、エントランスホール

参加費：無料(本館展示をご覧になるには、観覧券をお買い求めください。)

主催：国立民族学博物館

主管：音楽の祭日 日本事務局



— 福岡 正太 (人類基礎理論研究部 准教授)—

## 5. みんなく映画会 映像人類学フォーラム・国際シンポジウム

### 「アフリカからのイメージの創造—映像人類学トロムソ学派の民族誌映画—」

映像人類学の脈絡においてアフリカの諸文化は、欧米の研究者に調査・撮影対象として一方的に客体化され表象される傾向が強くなりました。そのようななか、ノルウェー北部に位置するトロムソ大学映像文化研究科は、1997年の設立以来、カメルーン、マリ、エチオピア、ブルキナファソ等のアフリカ各国から学生を迎え入れ、民族誌映画制作の実践を主軸とするカリキュラムのもと、多くのアフリカ人映像人類学者を輩出してきました。

本企画では、1日目(6月23日)に本研究科に所属、あるいは本研究科を卒業した映像人類学研究者(Trond Waage トロムソ大学准教授、Rachel Issa Djesa トロムソ大学講師、Mouzamou Ahamadou カメルーン、マルア大学講師兼任、同研究科卒業生)による民族誌映画を上映します。2日目のシンポジウム(6月24日)は、日本のアフリカ研究者の作品や制作計画の発表を行います。アフリカの様々な文化現象や社会問題に対する、カメルーン、ノルウェー、日本の人類学者の視点、映像のアプローチを比較検討し、議論します。



日時：6月23日(土)10時30分～17時、24日(日)10時30分～17時45分  
会場：国立民族学博物館 第7セミナー室  
定員：60名(先着順/事前申込不要) |  
参加費：無料

— 川瀬 慈 (人類基礎理論研究部 准教授)—

## 6. 身近な自然から世界へ：動物と人、植物と人のかかわり

### —特別研究シンポジウムからのレポート

[詳しくはこちら](#)

2018年3月19日～21日、特別研究 国際シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」を開催し、最終日の午後、みんなく近郊の3箇所を巡検に訪れました。そこで海外の研究者は高層ビルに隣接する竹林、山林を取り囲む長いフェンスに驚き、日本の自然について興味深い見解を述べました。

本シンポジウムは、植物や動物などの生き物利用、絶滅、保護の変遷を通して、現代文明と環境との関係を考えることが目的でした。

今回は、本シンポジウムの成果から身近な自然と世界とのかかわりについて説明します。



— 池谷 和信 (人類文明誌研究部 教授)—

## 7. 研究こぼれ話

### なぜ鶺鴒のウミウは産卵したのか

2014年4月、京都府宇治市の宇治川の鶺鴒においてウミウが産卵しました。日本の鶺鴒ではこれまで野生のウミウが使用されており、人工化は記録上初めてのことでした。発表者は、茨城県日立市におけるウミウの捕獲作業や、日本各地の鶺鴒におけるウミウの飼育方法にかかわる調査を実施し、宇治川の鶺鴒でのみウミウが産卵した要因を明らかにしました。その成果を報告します。



孵卵器のなかに入れられたウミウの卵。このなかの一つが孵化した  
(京都府宇治市、2014年6月筆者撮影)

— 卯田 宗平 (人類文明誌研究部 准教授)—

## 8. 研究こぼれ話

### インドで高齢者はどう生きるか—エイジングと狭間の世代

インドは、若年労働者人口が多く、さらなる経済成長が見込める人口ボーナス期にありますが、同時に少子高齢化も確実に進んでいます。都市部では、子ども世代の海外／国内移動、核家族化などにより、独居や施設への入所、ケアワーカーの導入など、これまでの「伝統的な」インドの高齢期を生きる高齢者が増加しています。インドにおけるエイジングについて、「狭間の世代」に注目しながら、その変化について報告します。



友人たちとカードゲームを楽しむ高齢者。  
インドの高齢期の過ごし方は変化しつつある。

— 松尾 瑞穂 (超域フィールド科学研究部 准教授)—

※その他の配布資料

外来研究員受入一覧(資料5)、外国人研究員新規受入一覧(資料6)



国立民族学博物館

懇談会についてのお問い合わせ

国立民族学博物館 総務課 広報係

電話 :06-6878-8560(直通) FAX:06-6875-0401 Mail:koho@idc.minpaku.ac.jp